

さけぶ

ひなた にこ

もくじ

1. 手を、繋ごう(てを、つなごう)
2. 切な色(せつないろ)
3. 優に甘く せつに愛しく(ゆうにあまく せつにいとしく)
4. 名も無い詩(なもないうた)
5. 破片(はへん)
6. 誰が為に(たがために)
7. 行かないで、ここにいて(いかないで、ここにいて)
8. 君は未だ知らない(きみはまだ知らない)
9. だから、なおさら思うのです。(だから、なおさらおもうのです)
10. きみのて
11. リンク
12. run run run!
13. 君に出会わなければ(きみにであわなければ)
14. if
15. トゥ
16. 切れゆく肌と露出した意味(きれゆくはだとろしゅつしたいみ)
17. 飛び立とう、どこまでも遠くへ(とびたとう、どこまでもとおくへ)
18. 小さな(ちいさな)
19. キミがいない世界なら
20. きみのとなり

手を、繋ごう

きみの小さな手

守っていこうと決めた日

きみの小さな手は

傷だらけで

ぼくは苦しかった

この手で

包んで

きみが嬉しそうに笑う

それだけでも

幸せになれる

単純なんかじゃない

けれど

難しいことよりは

簡単かもしれない

だから

これが

ぼくにできる精一杯

きみを大切にする

証だよ

さあ

手を、繋ごう

切な色

苦し紛れに
放った言葉
あなたの足に絡みつき
僕はまるで怪物
むやみやたらと涙を流し
あなたを痛めつけるだけ

僕はまるで錆びたナイフ
切れ味が悪くて
痛みが増すの

もしも詠ったこの詩が
何かをもたらし
染めるなら
僕色に染めて
何もかも
切な色

素敵な世界ではないけれど
なんとか生きていける
そんな場所

優に甘く せつに愛しく

真っ白だった
たしかそう
それまでもそう

切り傷だらけの翼に包まり
僕は苦しく嗚咽をし
ぐちゃぐちゃになるまで吐き出して
自分自身を蔑んだ

暖かなくても良い
ただ求めたかったものは

素直になりたい
ただ望みたかったものは

この翼の傷を見て
労ってくれなくて良い
そんな贅沢言えはしない

そっと
隣に座ってくれる

僕もそっと
隣にいられる

どんなに素敵なことだろう

きっと言葉では足りない程に
潤うものだろう

君と恋をしていること
幸せに思うんだ

条件なんて必要無い

君を好き
君が好き

こんなに溢れてくるんだ
君への想い

闇も光も
愛してる

僕の想いが足枷になる
そんな日もあつたらう

けれど
素直に互いを知れる

僕は誇りに思うんだ

守り守られ
傷つき傷つけ合い
癒し癒され
愛し愛され
型に嵌まることはない

恋愛に
誰も型など付けられない
そう思う

嬉しいこと楽しいこと
不満なこと悲しいこと

ありのままを好きでいる

押しつけ合いは必要ない

完璧はたのしくない

それでも好きでいるのだから

互いの翼に包まれる

僕らは恋をしてる

優に甘く

切に愛しく...

名も無い詩

両手を広げて

瞼を閉じて

感じる空気に

痛みさえ覚えるこの寒空に

紅く色づくこの頬を

そっと撫でるその手のひらに

ボクは安心できている

名も無い詩を詠おうか

この囁れた声

この水無き声に

他のだれも

見向きはしないだろう

ただひとり

振り返る人

それだけでボクは

満たされるのだから

それ以上を

求める必要が

あるはずもないだろう

優しさが光なら

悲しみは空気

喜びは風

痛みは雨

どれ一つとして

欠かせないもの

名も無い詩を詠おうか

いつかキミが詠ってくれて

ボクも詠えるようになったから

この囁れた声

この水無き声に

僅かでも良い

心を残せるならば

残せる全てを込めてみよう

名も無い詩は

詠われるため

名も付けられずに

さ迷うものか

きっと詠われるものとして

その望みを忘れることなく

在り続けている

破片

透き通り、キラキラして

この両手の隙間からこぼれていった

粉々になった想いが

ほらこんなにも輝いている

ずたずたになって、血だらけなのに

この心は何かを求めて

強く鼓動している

その振動を一つ、また一つ受け止めて

ボクたちは強くなっていく

季節が変わっていくにつれ

ボクは

ほんの少しずつだけれど

変わっていく

変わって行って

それでももっと強くなりたくて...

バラバラに散らばった破片を

両手でだきしめてみた

冷たくなっていたけれど

戻していく

この手で、すこしずつ

そうして

それがガラクタであっても

キミを、信じている

ちゃんとまた

なまえを呼んでくれるって

壊れやすいボクを

そっと優しく包んでくれる

キミの

その身体にある

ボクの求めていたモノは

命を

くれるんだ

誰が為に

涙が流れる

涙が流れる

白く乾いた頬を伝い

そのしずくの行く先は

愛が観えない

愛が観えない

痛むほどに心を開き

そのひかりの行く先は

誰が為に

誰が為に

生きる理由に全身を委ね

そのわたしが行く先は

いったいどこに

あるというのか

行かないで、ここにいて

分かりきっていること

そういうものほど

認めたくない

分かりきっていること

そういうものほど

諦めが必要

悲しすぎる現実を受け入れる

そのチカラが

僕だけでない

たくさんの人に

たぶんきっと

欠けているから

人はみんな

寂しがりやで

臆病者で

失くしたくないものが

山ほどあるんだ

つなぎとめるだけの力を持つものは

きっとどこかで

小さな

些細な何かを

失くしてる

力がないものは

貪欲に

切ないほどに

求め続けるから

行かないで、ここにいて

失くしたくないもの

失くしたくないモノ

人間は

みんなきっと

欲張り

だからなおさら思うのです。

口では百も言えることを、

体では半もできやしません。

情け無し。

情け無し。

そう自分を叱るのです。

そうしてひどく、

空しさに支配されてしまいます。

わたしは

惰性を許しているのだ。

わたしは

甘んじているのだ。

焦燥感に苛まれる日々に、

とてつもない絶望と

数え切れない言い訳とを

嫌になるほど吐いてきました。

誰かに、

叱られることを望み、

蔑まれることを恐れ、

安心を与えられることを待ちわびる。

そんなわたし。

だから、なおさらおもうのです。

まるで深く碧い海のまぐろのように、

動き続けていなければ、

わたしはわたしを喪うと。

きっと廻り続ける生命(ぬくもり)を、

とめてはいけないことと同じように、

巡り続けていなければ、

だれかに寄り添うことは適わないと。

こんなわたしだからこそ。

君は未だ知らない

君に視えないものが

僕には見えるけれども、

僕に視得ないものが

君には視得るのだから、

なんとも

世の中

理不尽である。

その理不尽というものから

なんらかの情報と知識を盗み出し

そうして

そこから

どうにか

こうにか

恋にでも

欲にでも

墮ちようというのだから、

まったくもって

可笑なことだ。

君はまだ知らないだろう。

その理不尽に

齒向かおうとした僕が、

そんな可笑しなことに

挑発され、

自ら試みようとしていることを。

それが、

どうであれ

君のためである以外には

ありえないということを。

きみのて

きみが差し出した手を
単純で無知なぼくは
力一杯握り締めた

たくさんたくさん
涙を流して

澄んだ空気と
重たい空が見える世界

きみとはぐれない様に
その手をしっかりと握った

きみは
握り返してくれない

ぼくが繋ごうとも
きみはただ差し出しただけで
繋ごうとはしてくれない

ウソかホントか
分からなくなって
放そうとした

苦しくて
悲しくて

やっぱり放せない自分が
すごく
腹立たしくて

きみの
偽善や曖昧が

ぼくは
理解できない

ぼくは
きみには必要ない

もしぼくが消えたって
少し悲しめば
ただの記憶になって
思い出にはならない

そのことに
きみの綺麗な手を取ってから
気付いたよ...

リンク

たくさんの繋がりが

きみとの繋がりを

生み出した

だからぼくらは

『きみとぼく』でいられる

手を繋いで

心の中で

たくさんたくさん

笑って泣いて

そうしてずっと

きみとぼくと

run run run!

間に合わないと分かっている

けれど

この気持ちが

どれだけの重量でも

おなじものを背負って走り続けた君を

僕は

追いかけてたい

今度は僕が

走り出す番

間に合わないと分かっている

だからこそ走るんだ

目の前にいなくなっちゃって

視界に入れてしまおう

君の見慣れた後姿が

霞んでしまう前に

擦り傷の鋭い痛みだって

厭わない

ただ

全力で走ろう

努力すること

一生懸命になること

無駄じゃないって教えてくれた

君の元へ

いま僕は

走り出す

君に出会わなければ

君に出会わなければ

僕は誰より卑怯でいられたかもしれない

君に出会わなければ

僕は誰より残酷でいられたかもしれない

君に出会わなければ

僕は喜びを知らなかったかもしれない

君に出会わなければ

僕は守るものが無かったかもしれない

君に出会わなければ

僕は苦しまなかったかもしれない

君に出会わなければ

君に触れることも無かったかもしれない

君に出会わなければ

君に恋することも無かったかもしれない

だけど

君に出会えて良かった

君が誰より好きだ

もし僕が
道脇に咲く花の様な
愛らしさを持っていたら

もし僕が
あの広い空を舞う鳥の様な
自由を持っていたら

もし僕が
眩い程に輝く夕焼けの様な
優雅さを持っていたら

もし僕が
全てを撫でる風の様な
穏やかさを持っていたら

もし僕が
大地を潤す雨の様な
賢さを持っていたら

あなたは僕を

愛してくれましたか？

混沌としたこの世に
1秒ずつの歴史を紡ぐ
生きる誰もが
どこかに闇を持つからか
この世界は美しい

光だけでは眩しいばかり
時には影もさしまししょう

みな不器用だから
うそばかりつけやしないさ
心のどこかは素直でいるさ

確信なんてどこにも無い
人は混雑で生き
無を求めてさ迷い歩く
辿り着くものが何であろうと
それが生きた証ならば
疑う意味はかけらも無い

愛することも恋することも
この世界を維持するため？

もしそれが世の正論なら
あたしは過ちを犯そう
それでも時間は続くでしょう？

愛することと恋することに
そんな理屈があるのなら
あたしはそれを棄ててしまおう

解っていても
この心は
決まりごとでは治まらないのさ

若げの至りじゃ
無いんだよ

ただの気紛れだなんて
決め付けないで

必死に
衝き動かされ
惑わされても
存在価値を守り抜く

切れゆく肌と露出した意味

ひとつ

ふたつ

つけていく傷

意味を探して

見つけて

悲しくなって

朱く滲む

黒い液体

露出した意味

濡れていく

知らなければ

後の祭り

もう遅すぎた

何もかも

切れゆく肌は

透明度を上げ

露出した意味

切りつけられる

飛び立とう、どこまでも遠くへ

君がくれた翼は
白くも黒くも無くて
何よりも頑丈で
きっとどこまでも飛べると思う

だから僕は
この翼で
どこまでも飛ぼうと思う

それで
君が見えたら
笑顔で
手を振ろう

傍に降り立って
手を取ろう

君をそっと抱きしめて
優しく飛び立とう

飛び立とう
どこまでも遠くへ

この背中にあるものは
君がくれた翼で
白くも黒くもなく
何よりも頑丈で
きっとどこまでも飛べると思うから

キミがない世界なら

キミがないこの世界

ボクが頼れるものは何もない

だから

ボクは死んでしまう

ボロボロになったボク

ただの肉塊

無表情で笑い

心の中は真っ黒で

たださ迷うばかり

キミは残酷極まりない

時計の針が右に進む度

ボクに苦悲が課せられる

どんなに叫ぼうとも

たとえ喉から血が出るほど叫ぼうとも

キミには

二度と届かない

悲しいよりも

辛いよりも

もっとひどいものが

ボクを薄く包む

キミがない世界は

こうして生み出される

きみのとなり

青い夕方に見惚れる

全てが水の中みたい

ぼくの肩で

寝息をたてるきみ

長い睫毛で

影のできる目元

見ているだけで

穏やかになれる

そんなきみのとなりが

今は好き

あとがき

こんにちは、ひなたにこです。
はじめましての方、はじめまして。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。

今回は、『さけぶ』ということで、届かない思いや伝わらないもどかしさ、激情をテーマにまとめてみました。

なので少し暗い印象のものもあります。

恋に限らず、日常の煩わしいことや理不尽なことに立ち向かいたいというような気持ちで書いたものです。

これからも様々な感情を、表現していけたらと思います。

また、これからもよろしくお願いいたします。

読んでいただきありがとうございました。

2014年5月19日

ひなた にこ